談話室

農業に想う

私は，世界文化遺産で有名な姫路城から８kmほど北の小さな山村の農家の生まれである。両親は少しばかりの田畑で米，麦と数種類の野菜を作っていた。もう，50年以上前の話であるが，当時，小学生であった私にとって，農繁期には農作業の手伝いが大事な仕事となる。田植え，草刈り，稲刈り，脱穀等機械化の進んでいない当時は大半が手作業であり，家族全員が自分のできる仕事をこなす。家族がひとつになっていた。また，そうしなければ農業が成り立たなかった時代である。そして，秋になるとたわわに実った稲穂が真っ赤な夕日に映え，赤とんぼがたくさん舞う美しさが今でも心に残っている。一方，子供心に，もっと一枚の田を大きくし，形も四角に，畔も広くすれば楽になるのにと考えた。米国では，大きなトラクターで畑を耕していると本で読んだことがあり，「早く日本もそうなれば」と当時では夢みたいなことを思った。

今では，田畑は整備され，機械の導入により，農作業は飛躍的に省力化され，週末に作業をすれば事足りるようになった。また，エアコンつきトラクターまでも導入され，作業環境も格段に快適になった。この楽になった分が１戸あたり約1,500万円の投資効果なのかと疑問を禁じ得ない。

一方，最近では荒れた田畑も目に付く。私は，現在週末に小さな畑を耕し，野菜・花を作っている。いわゆる趣味の農業である。穫れた野菜・花は知人に配るほか，誰にでも自由に持ち帰っていただいている。農作業をしていると，近所の農家の人が，種のまき方から移植時期，肥料のやり方，虫の取り方まで指導してくれる。その際，農業談議に花が咲くが，農業の先行きについては「米を作るのはもう止めることにした」「将来誰かこの田畑を管理してくれる人はいないか」といった悲観的な話が多い。種々の機械を備えた大きな農家なのに，高齢で機械を扱うのが危険だということで，使い手がいなくなるからである。

新しく発表された，「食料・農業・農村基本計画」に基づく集落営農構想についても話題となるが，なかなか理解が進んでいないのが現状のようで，やはり地域の実状に合った枠組みが必要なのであろう。

このような農村の状況ではあるが，一方では農業経営者として独自の道を切

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。

り拓いて活躍する若い農業担い手も育ってきている。

Ａ氏は，30haの稲作農家であるが，完全無農薬栽培に挑戦している。また，「そば」を栽培し，そば作り教室も開いて農業への注目を引き，更には新規就農者に宿泊施設つきの実践指導を行っている。そして，社会貢献の一環として，登校拒否・拒食症の子供を滞在させ，農業の楽しみ・歓びを教えている。

Ｂ氏は，バイオの研究を行い，独自の品種改良に取り組んでいる。日本で一番美味しい米作りが，彼の目標である。

Ｃさんは，地元の主婦と共同で地元産米を使った独自の「巻き寿司」を作り販売している。一度食べると「やみつきになる」という人気を得て，遠隔地から買いにくる客が後を絶たない。

さらに，Ｄさんは，天然記念物となったコウノトリと自然農法との研究に取り組んでおり，同じ無農薬栽培でも地域に合った独自のやり方を研究している。

その他たくさんの方が自分で考え，試みと失敗を繰り返し，常に新しい農業のあり方を研究し実践している。

そして，それを支えているのが，同じ志をもったＥ氏のような農業改良普及員である。私は，そのような人々のネットワークづくりに関わっている。地域の農業をどうするのか，地域社会や消費者との関わりをどうするか，そこには言葉や知識ではない，汗のしみこんだ実践があり，数々の成功談・失敗談がある。このネットワークが全国的な広がりを見せれば，日本の農業は，再生できると確信している。重要なことは，様々なことを自ら進んで研究・実践している人が，意見交換をしながら，地域に最適な農業のあり方を見つけていくことである。食とエネルギーと環境が密接に絡んだ農業の課題を自主的に考え実践する仕組みづくりが急務となっている。

さらに，それらを背景に，協同組織のあり方を見直すことが必要な局面も出てくる。農業を核にした地域協同型，農業生産を中心とした生産協同型等，目的に合った協同組合づくりへの検討を始めるべきであり，先進国である欧州の協同組合を参考に，現在の日本型組織のあり方を議論してもよい時期だと思う。その局面では微力ながら，少しでもお役に立てればと思うこの頃である。

(兵庫県信用農業協同組合連合会 代表理事理事長

中村芳文・なかむらよしふみ**)**

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。